イギリスにおける病院の近代化

小沢吉見

ヨーロッパの近代史は国によって、その開幕の時期や様子が異なっている。

この近代化といっても、政治上、経済上、文化上と各方面にまたがり、それぞれの国の事情、国民の生活と深く結びついているためにその発現の様子や周囲との摩擦に特色が見られる。

文化史上に例をとるならば、近代化に努力しながら、なかなか成功しなかったよい例は、ドイツにおける文化闘争 Kultur Kampf がある。ドイツの鉄血宰相と称されたビスマルク（一八一五—九八）の努力にも拘らず、強大なカトリック教徒の抵抗にあって、政教の分離に失敗している。

これよりも早く、イギリスでは、国王ヘンリー八世（一四九一—一五四七）の手による近代化の努力が注目される。

一五三四年にはじまるイギリスの宗教改革の成果である。ヘンリー八世は首長令を出して、ローマ・カトリック教会から分離してイギリス国教会を創立した。

修道院を解散して、イギリスの近代化に着手した。この中で注目されるのが長年、修道院の手に委ねられてきた病院の経営が国王の手によって近代化に向ったことである。

病院といっても Almshouse, House of Pity の伝統をもった宗教色を排除することは大変である。宗教色の濃い Care よりも合理的な Cure に重点をおく近代的な病院への脱皮はこのヘンリー八世の手によって断乎として行われた宗教改革、修道院の解散、その財産の没収の成果の中の一つであった。

フランスでは大革命（一七八九年）下の共和制のもとで近代化への歩みを踏み出したのがイギリスでは早くも十六世紀に成功したことはヘンリー八世の下した鉄槌のお蔭である。ここに Royol Hospital が登場する。

（名古屋衛生技術短大）